夕焼け通信1273号　2020.8.31

〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-402
miyaken@me.com　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/
編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）19

木幡智恵美

懐妊（3）

母親が身ごもると、言葉に出さなくても、また身体の変化も見えないのに、子どもは何かしら感じるようで、これまでと違う態度を見せるようになる。「ババ、ババ」と、実歩がやたら私にべたつくようになったのも、その関係だろうか。

六月の下旬にさしかかった頃、保育所の参観日に付き合わされた。自分は寛大のいるきく組に行くので、私は実歩についてくれと言われ、さくら組の部屋に入る。

全員が揃うまで、ブロックで自由遊び。実歩は大好きなブロックを前に、触ろうともしない。ブロックを拾って手に持たせても、私の膝にのったまま、ちょっと触るだけ。やっとブロックを重ねるようになった頃、全員が揃った。

朝の会が始まり、おはようのあいさつと、歌。実歩は口を開けようとしない。点呼でも、おずおずと少し手をあげたくらいで声は発せず。

そして、さくら組さんのその日の活動が始まった。会食のメニューである、おにぎり、豚汁、おひたしに使う材料を、それぞれの組で分担して下ごしらえするのだ。さくら組ではしめじちぎりとこんにゃくちぎりをした。ちなみに寛大のきく組は、ニンジンの型抜きとおにぎりの具作りだったそうだ。

周りを見回すと、若いお母さんにお父さんばかり。お祖母さんは私ともう一人だけ。寛大が生まれてしばらくは、「お祖母さん」が他人事に思えたが、今ではもう板についた。若いお母さん方と顔を見合わせて笑うこともできるようになった。

実歩はといえば、何とかしめじちぎりやこんにゃくちぎりはこなしたものの、「さあ、順番にトイレですよ」と言われたら、私をトイレにまで引き連れていく始末。

昼食会場で、お母さんとお兄ちゃんと合流し、やっと笑顔が出た実歩。ただ普段と違う雰囲気に緊張していただけだったのかな。

がらがら橋日記

宮森健次

酷暑

猛暑が続く。学校は、近年徐々に二学期の始業が早くなっているが、それに加えてコロナのせいで、例年より一週間も早く始まった。収まる気配を見せない酷暑が、出鼻に噛みついてきたかっこうだ。

盆を過ぎたらしのぎやすくなる、というのが幼い頃から染みついた感覚なのだが、今の子どもたちは外遊びも体育も命の危険と隣り合わせで制限されるのが夏、とすり込まれていくのかもしれない。

日の出は遅くなっているので、この頃は走り始めるのは、まだ暗いうちである。一日のうちでもっとも気温が下がっているはずなのだが、熱帯夜のずっしり重たい空気に十分に蒸されたアスファルトの臭いが混ざって、走る前から体が汗ばんでくる。体内の水分と走る気力がじわじわと失われていく。

いつも見かける散歩やジョギングの老人たちの数が少ない。熱中症を恐れて自制したのだろう。それが正解なのだが、ひとたび止めてしまうと、再開する気になるかどうか疑わしいので、運動不足による神経痛やだらしない腹囲を想起して、困難から逃れようとする心を押さえつけにかかる。

走り始めるとすぐにわかるのだが、まったくペースが乗らない。理由は明らかである。体温に近い高温高湿度の中で走ると、体温を下げるために汗をかこうとする。体内の水分をせっせと放出するために心臓も拍動の数を増やす。日頃と同じ心拍数で走ると自然とペースは落ちる。いつものペースで走ろうとすると、心臓はオーバーペースで応じざるを得ない。

と、どこかで読んだ理屈をもってして納得にかかるのだが、実際のところは理屈などどうだっていい。まったく走る喜びが感じられないのだ。これがさらっとした早朝であったり、きっぱりとした冬だったりすると、途中で足が勝手に出ていくような感覚がところどころにあるのだが、猛暑の道中は、ただただ苦痛でしかない。それなら仕方ない、ゆっくり走ればよい、と思うべきだが、ペースを落とすと通常の自分に劣後しているようでどうもおもしろくない。つまらぬことにこだわってしまうのだ。そのうち、内臓や足にちょっとした違和を覚え、予定を切り上げて終わる。

ここで無理をしてはいけないというのを去年覚えた。予定通りを尊重したために、軽度の熱中症になってしまったのだ。初めは手先、そして口にしびれを覚え、何だろうかと不審に思いながら走っているうちに、体がガクンと重くなった。どうにか家にたどり着いて水分や甘味を補給して事なきを得たものの、危なかった。低血糖の恐ろしさは、一度山でも経験した。いずれも慣れてきた、いけいけの頃である。

30代フリーター　やあ、ジイさん。新型コロナウイルスの直撃を受けた今年4～6月期のGDPは年率換算で27・8％減と、戦後最悪の落ち込みとなった。

年金生活者　経済学者の池田信夫は政府が安全宣言すれば経済は回復するとして、次のようにツイートしている。

「日本の経済危機の原因は過剰な自粛や接触制限。これをやめれば経済は回復する。そのために必要なのは、政府が安全宣言して自粛から撤退すること。それによって感染は増えるだろうが、命は失われない。『金か命か』というトレードオフは存在しないのだ」。この指摘はそれ自体としてはほぼ正解に近いように見える。

30代　政府の安全宣言など信じる国民がどれだけいるか。

年金　東洋経済オンラインが厚労省の報道発表資料をグラフ化したサイトによると、緊急事態宣言が出されてからいったん減っていた1日当たりの検査陽性者数は、6月下旬ごろから再び増え始め、8月7日には過去最多の1595人に達した。今は数百人に減っているが、それでも、最初のピークだった4月10日の708人と同レベルの数だ。ただし、陽性者数が春より増えたのは感染の拡大よりも検査件数の増加や検査の感度の向上などの要因が大きいと考えられる。

一方、死亡者数はいま多くて1日10人台で、ピークだった5月8日の49人比べると4分の1程度だ。陽性者数は全感染者数ではないのに対し、死者数はほぼ全死者数と見ていいはずだから、感染の拡大ないし縮小のトレンドをつかむには後者を見るほうがより正確だ。死者が減っているということは、感染が下火に向かっているということにほかならない。それに、日本の人口当たりの死者数は欧米に比べると最大ふたけた少ない。この少なさはアジア諸国に共通した特徴だ。原因は解明されていないが、流行当初から変わっていない。

だから、死者がこれから急増する可能性はほとんど考えられない。現在の累計1200人超を大幅に上回る事態はまずないと予測できる。たとえば2018年のインフルエンザの年間死者数は厚労省の資料では約3300人だから、新型コロナの怖さはインフルエンザ並みと考えて大きく外れることはない。

30代　だからといって、ワクチンも治療薬もないのに、安心できるわけがない。

年金　新型コロナの死者は少ないと聞かされても、その少ない死者の中に自分が入らないとは限らない。上位当選はまずないとわかっていても宝くじを買ってしまうような心理が働く。

もしいま政府が安全宣言をしたとしても、国民は自粛を大幅に緩めることはないだろう。GoToトラベルキャンペーンがあまり盛り上がっていないことがそれを予感させる。国民が新型コロナをインフルエンザ並みとみなし、生活を流行前に近いところまで戻すには、少なくともワクチンと治療薬という安全網、安心網ができていることが条件となるだろう。

30代　日本人がマスクをする動機は「人が着けているから」というのが圧倒的に多いことが、社会心理学者らのチームの調査で分かった、と報じられていた（8月11日日本経済新聞電子版）。

年金　私がマスクをする理由も同じだから、うなずける調査結果だ。

同じ社会心理学者で池田謙一という同志社大学の教授が、英国の世論調査会社「ユーガブ」の調査結果をもとに「日本人の感染回避行動が他国の人びとより上回るのは、マスク着用率のみである」と書いている（「バーチャル共感が『統治の不安』を克服する」、『Voice』9月号）。「手洗いの励行率も世界平均より低い」とし、「緊急事態宣言の全面解除時に首相が誇った『日本モデルの力』の背後の衛生意識は、この程度であった」と指摘している（同）。

マスクの着用率だけが他国を上回っているのは、手洗いや「3密」回避と言った行動に比べて人目につきやすからだろう。つまり新型コロナへの対処を何から何まで他人に合わせているのではなく、人目にさらされることに限って周りに同調していると言えそうだ。

30代　コロナをあまり怖がっていないということか。

年金　池田は同じユーガブの調査結果を引いて「他国に比べ、日本国民が抱く感染への恐怖は異様に高い」と述べている（同）。「同調査データにおいて、日本国民は政府のコロナ対応について世界〝最低〟水準の評価をつけていた」とも指摘しており、政府への不信が恐怖を増幅していることがうかがえる。

それなのに、マスク着用以外は感染予防に諸外国ほど熱心でないのはなぜか。他国の人たちに比べて、コロナそのものへの恐怖は小さいが、隔離や感染者への非難を恐れる気持ちは大きく、両方の恐怖を足し合わせると、他国を上回ってしまうと解釈することができる。これは私自身の実感とも一致する。

このことから推定できるのは、国民の多くは人目につかないところではそれほど「自粛」はしていなくて、政府の呼びかけた「人との接触8割削減」はとうてい達成されかなかっただろうということだ。その結果、日本のGDPの落ち込み幅は、ロックダウンしたスペインやイギリスなどに比べて小さかった。

ニュース日記　751

中村　礼治

コロナの心理学